＊＊　私たちの住む金田村の記憶　＊＊　　（２０２２．３）

２　金田村国民学校　戦中、戦後の教育 ・ 地域　＜　その２　＞

（５）　地 域 行 事、日 常

＊　＜１・２年生＞

団子焼き：　いい思い出だった。長持では「しまむら」近くの道路の中央に「小屋がけ」をする。自転車で通る人は「小屋」をよけて他の道を通った。長持に限らず、どこでも盛んにやっていた。

前の日のうちに大人が小屋を作り、子どもたちはリヤカーを引き、各家一軒ずつ訪ね正月飾りなどを集め、お金ももらった。

当日は５・６年生だけが小屋に入り、大人にお酒を売る。集まったお金でバットやドッチボールを買い、学校へ寄付をしたこともある。

お金を分配するのは６年生、学年ごとに金額が決まっていて、学年の人数が多い時には、一人一人のもらうお金が少なかった。

子どもたちの自主的な行事だったので、とても楽しかった。男だけの行事だった。

遊 び：　本やゲームは無く、学校から帰れば、外で遊ぶ一方だった。遊びたくて、遊びたくて、遊び道具はいろいろ自分たちで作った。竹とんぼ、竹馬、人によっては屋根に届く高い竹馬、竹バットでやる田の中での野球等々、

夏は、金目川での遊び、下流まで行き、大久保公園でキャンディを買って帰るのが楽しみだった。おはじき、数珠玉入のお手玉などは女子。遊びは男女一緒にすることはなかった。口もきかなかった。

高学年の時だったと思うけれど、男子のやっていた野球を女子もやった。放課後、誰が言い出したか分からなかったけれど、女子組、男子組に分かれてボールを足でける野球をやった。途中から先生も加わり、すごく楽しかった思い出がある。

家の手伝い：　家の手伝いもよくやった。縄ない、ムシロやタワラづくり等、どこの農家でも自分の家で作っていたので手伝った。女子は洗濯、ニワトリの餌やり、田畑に出ている親に弁当の届け等、家の手伝いをよくやった。

食べ物：

- 母がサツマイモの葉まで煮て、つくだ煮のように作ってくれた。
- 学校でイナゴ取りをやらされた。

- 戦災後、家を建てたとき、大工さんの作業代をお金で払おうとしたが断られ、おコメで支払った。それだけお金の価値がなく、おコメの価値が高かったのだ。

- 冬になり水田の水が落とされ、あぜ道も水がなくなり、スコップでドジョウ取りをした。ドジョウだけでなく、スコップに当るのは焼夷弾。農家の人達からはそんな危ないものをといわれたが、不発弾が沢山出てきた。

- 川でウナギをとり、町の「川万」へ売りに行ったこともある。

- 土手のわずかな所に小豆を播き、収穫後売りに行った。

- 砂糖がなかった。サトウキビを煮て砂糖を作る。白い砂糖にならなかったけれど、重宝した。
  いろいろなものが配給で配られた。配給場所は長持の「神部さん」だった。塩の配給は子供の手には重く、田圃道を運びながら、これが砂糖ならいいなと思いながら持ち帰った。お芋を煮て砂糖代わりにしたこともある。

- 買い出しの人は毎日大勢来ていた。イモも掘るのを待つように並んで手に入れていた。お金でなく、着物などの物々交換だった。そのため農家には着物がいっぱいになった。　金田は都会から買い出しに来るくらい、恵まれていたのだろう。

- イナゴは佃煮、タニシは大根と煮る、おばあさんが作ってくれた。近くの川からは、いつもシジミが、いくらでもとれた。ザリガニの尾は味噌汁に入り、美味かった。
  食については、金田は実に恵まれていた。川で泳いだ後は野イチゴも口にできた。

衣服・履物：　通学に男子はズックの鞄、女子の中にはランドセルをもった子もいた。手製のランドセル。姉のお古の帯心で作られ、油絵の模様がきれいに画かれた。羨ましかった。

通学は下駄履き、記念写真の足元は、ほとんどの生徒が下駄履だ。

ズック靴が配給になったが、数が少なく全員にわたらず抽選をした。当ってもサイズ

が合わないこともあった。
　傘の配給の時、寺田縄の三人の女子全員に当たった。丁度数があったので先生も驚いていた。

　冬、寒い時の足袋は忝びす講以降に履くことになっていた。手はしもやけだらけだった。寒かったと思うが、その時は夢中で過ごしていたからか、ほかの人も同じだったからか、それが自然だと思っていた。

　服は着たきりすずめ、寒く袖で鼻をすすっていたので、テカテカになっていた。中には、あちこちつぎはぎだらけの着物だったが、さっぱりした物を身に着けていた。白い手ぬぐいも下げていた。おかあさんが見ていてくれたのだと思う。

＊　＜３・４年生＞

登 校：　戦前、集団登校の時は、列を作り一番上の人が連れて行ってくれた。

　校舎の東側の昇降口には掘りぬき井戸があり、裸足や下駄ばきで登校した足を洗い、教室に入った。また、校舎の脇に一畳ぐらいの小さな池があり、校庭で遊んだ後にこの池で足をジャブジャブと洗い、近くのドアから校舎に入った。

弁当など：　弁当を持たず、学校から走って家に帰り、食事をしてまた戻る。裸足だった。
　ご飯に梅干しの日の丸弁当。時には紅ショウガが添えられた。上等な弁当には醤油のかかった削り節がのせられていた。ほとんどの生徒は家に帰り昼食をとった。学校から遠い飯島や長瀬地区の生徒は弁当持ちだった。

衣服・履物：　衣服は、はんてん、着物。鼻紙がなく袖口で鼻水を拭く、袖口は鼻水が乾燥して、いつもピカピカになっていた。履物は下駄。通学には手製の肩掛け鞄だった。中には勉強道具はほとんどなく、アルミの弁当が入った。

　着る物はほとんどがお下がり、上の兄は新しいものが着られるが、下の者は着古しのお下がりになった。登下校には毎日、防空頭巾が手放せない。被ると冬は暖かった。

　男が集まると相撲を取って遊ぶことが多かった。

　ズックは買えなかった。母親の赤い鼻緒の下駄を履いたこともあり、中学も同じだった。思えば戦後が始まったばかりだった。

掃 除：　便所の掃除。３から６年生までが班を作って掃除を担当した。６年生になると自分はやらず、下級生にやらせる。掃除が終ると先生に報告をする。
　点検が済み先生が戻った後、「別れ」の合図を出さず、下級生を整列させたまま、６自分たちは鞄を持って帰ってしまう。駐在所辺りの遠くから、「別れ」と大声を出して帰したこともあった。（新校舎が出来た後のこと）

生活指導：　先生と親がおっかなかった。先生が家庭訪問で家に来たとき、戸棚の中に逃げ込み、どんな話をしているか聞き耳を立てていたこともある。
　親は先生に、悪いことをしたら「げんこつをくれてやってくれ」。とか、「叩いてくれ」とか言っていた。怖くて親とはまともに話せなかった。女の先生も厳しく、立たされ、ビンタもあった。

不発弾：こんなこともやった。焼夷弾ひろい。今だったら考えられないが、学校からやらせられた。田や畑に突き刺さったり、潜り込んだりして残っていた焼夷弾を拾い集めた。今の保護者だったら頭から湯気を立てるだろうが・・・。
　焼夷弾の六角形の一部はアルミ製。開いてハンマーでたたき下敷きにした。ところがアルミだから、やすりの上で字を書くようで、鉛筆がすぐにへってしまった。
　あの時分、子どもは折り畳みの切り出しナイフを筆箱に入れていた。鉛筆は自分で削ったものだ。

＊　＜５・６年生＞

登校班：　学校への登校の時、５・６人の班別で登校し、校門に守衛のように高等科の生徒が立ち、敬礼し、〇〇町、〇〇班、ただ今入校いたしましたと告げ入った。
かなり徹底され、軍国主義的だった。焼ける前に行われていた。

通　学：　学校への通学は裸足だった。焼ける前まで、掘りぬき井戸があり、そこで足を洗いワラ草履を履き教室に入った。相当寒い時期だったが、年いっぱい、足袋を履かない競争をしたことがある。今と比べると、着るものも粗末なものだった。

弁当など：　飯島は学校から遠いいので弁当をもってきていた。あとは家に帰って昼ご飯を食べた。学校では小遣のおばさんが、クラス分けしたお茶を用意してくれて、取りに行った。

生活指導：　先生方は厳しく、授業中居眠りすると白墨を投げつけられた。大きさは１㎝ぐらいに折って投げる。また、校庭を２・３周廻される子供が相当いた。罰は当たり前のことだった。女先生も厳しかったが優しい面もあった。

先生方にはニックネームがつけられた。妊娠してお腹の大きな先生に「たぬき」、色黒の先生には「イモ団子」などと付け、呼び合った。
何時だったか、運動場の真ん中で軍人が大なべでご飯を炊いていた。先生は勉強を教えてくれていたが、クラスの皆がその様子を見て大きな声を挙げたら、ビンタをくらった。事あるごとにビンタが付いて回った。

戦前だが、学芸会をやり担任の女の先生の指導で「サル・カニ合戦」の劇、オルガン伴奏の「お馬のかあさん」を唄った。楽しい思い出だ。

おばさん：　授業の始まりと終わりのカネを鳴らしてくれた。お願いして、理科や図工の時間に使う「のり」をうどん粉で作ってもらった。
子どもたちの面倒見が良かった。下駄通学で鼻緒が切れた時、すげ替えてくれた。転んで怪我をすると、保健の先生はいなかったので、包帯がわりに日本手ぬぐいを割いて消毒もしてくれた。消毒薬はマムシの焼酎漬けだった。とてもしみた。水神橋一帯にはマムシがいた。

伝染病：　学校で、「トラホーム」が流行ったことがあったが、なぜか罹った女子にはトイレを変えた。特別にトラホーム用と張り紙のある個室があった。

＊　＜卒業生＞　教科書・授業

小学校では文部省が作った教科書を使った。（国定教科書）

視学官：　学校の先生も自由がなく、監督されていたと思う。「視学官」が来る時、授業を見られるので、例えば、算数は三日くらい前から「ここをやる」と事前に徹底的に頭に入れさせられた。でも、当日になるとそれでもできなかった。
「視学官」の前では、校長先生や先生方は直立姿勢をとっていた。こういう状態では、やたらなことはできず、自由な授業は難しかったようだ。

学　習：　金目川沿いの農場（報国農場）で、サツマイモを栽培した。作業中、担任の先生は畑の土の上に棒でＡ、Ｂ、Ｃを書いて教えてくれた。英語は敵性語で禁じられていたが、「今後Ａ，Ｂ，Ｃぐらい読めなくてはだめだ」と云って文字を書いてくれた。
教室でも黒板に書いたＡ，Ｂ，Ｃを消し忘れ、教頭先生に見つかり、「だれが書いたのか」と大声で怒鳴られた。アルファベットは現在カタログなどにも多く使われ、注文の時など役立っている。教わったことが良かった。

先生には他にもいろいろ教わった。キャベツ、ジャガイモなどの育て方、収穫までの一年間を丁寧に教わり、今でも役立っている。

水泳訓練：　豊田堰で泳いだ。平等寺にも池があり、そこで泳いだ。水は汚れていたので、目の病気「トラホーム｝がはやった。流行病なので、伝染することを心配して、トイレを別にしたりした。

生活指導：　当時の先生方は怖かった。忘れ物、大声を出したりすると「立て・・」と云われ、水の入ったバケツを両手に持たされ廊下に立たされた。小遣さんが「もういいよ、先生に話すから」と、助に入ってくれた。

勉強の時間はよそ見などできず。姿勢良く聞かなければならなかった。先生によっては白墨を投げ付ける。黒板を指し示す棒で撲られる。全科目を受け持つのは、先生も大変だったと思う。教室にはラジオもなかった。担任は２年間持ち上がりだった。